

川越市立図書館の貴重な資料

川越市立図書館は、元来、貴重な和漢古書と郷土資料の収集に努めていたことが知られていますが、中でも、新井政毅と山田衛居の旧蔵本を根幹とした約200冊の資料群は、特に貴重なものとして別置され、現在に引き継がれています。

新井政毅（1827-1902）は川越志義町（現在の仲町）の住人で、生来学問を好み、国書・漢籍に精通した人物であり、蔵書家でもありました。一方、山田衛居（1849-1907）は、川越氷川神社の祠官で、やはり、読書家のみならず蔵書家でもありました。2人は親しい友人であったとも伝えられています。

冒頭で紹介した約200冊の資料群は、図書館が所蔵する多くの和漢古書の中から、比較的善本とみられるものを別置したものです。選定の基準に多少の異論もあるといわれていますが、慶長（1596-1615）以前の古写本等をはじめ、特色ある資料が含まれた貴重なコレクションです。



「袖中抄」
釈頭昭 撰
天文22写（藤原言継等）

「源氏物語十二月絵料」
賀茂真淵 撰
写（清水浜臣）

例えば、歌学書『袖中抄』
(20巻5冊)の写本は、各冊末の記述により天文22年(1553)写と考えられていますが、天文22年といえは今から450年以上も昔のことです。

また、江戸時代中期の儒者成島錦江述の『芙蓉楼玉屑』及び賀茂真淵撰と伝えられる『源氏物語十二月絵料』の写本は、どちらも珍しい資料ですが、近年、研究者の手により全文翻刻がなされ、その

解題も公表されています。縁あって川越市立図書館で保管することとなったこれらの資料に光が当てられることは、喜ばしい限りです。

その他、この資料群には、『金槐和歌集』の写本、元禄6年(1693)刊の伊勢物語の絵入り注釈本『伊勢物語絵抄』など和歌に関するもの、『豊後風土記』といった地誌など、様々な資料が含まれています。いずれの資料も桐箱に入れられ、中央図書館の貴重書庫で大切に保管されています。

資料は、温度、湿度、紫外線、ホコリ、カビ、虫など様々な要因により劣化していきます。劣化の原因に応じた対策を講じ、貴重な資料を後世に伝えていくことは、今も昔も変わらぬ図書館の使命です。

読書のバリアフリー 「音声版 山と溪谷」の製作を通じて

図書館では、障害や高齢などの理由で活字による読書が困難な方々のために、本などの資料を別の媒体に変換し提供するサービスを行っています。その方法のひとつに活字を音声化する「音訳」があり、具体的には対面朗読や録音資料の製作をしています。これらは、朗読法や録音操作に関する専門的知識・技術を身につけた図書館協力者との共同作業で提供しています。ここでは、そのサービスのうち、「音声版 山と溪谷」（抜粋版）の製作について紹介します。

視覚障害があっても山登りを楽しみたい、そのための情報を得たい—そんな要望を受け、平成9年に月刊誌『山と溪谷』（山と溪谷社）の音訳が始まりました。当初はヘレンケラー点字図書館の協力のもと「川越市朗読の会」（注1）がボランティア活動として、平成12年からは川越市立図書館が図書館の業務として製作することになりました。初期の音訳に携わった人の話では、著作権処理が困難だった当時、公共図書館が雑誌の音訳に取り組むことは前例がなく、この取り組みは全国の公共図書館の中でも先駆けといえるものでした。その結果、「音声版 山と溪谷」は多くの貸出し希望を受け、人気の録音雑誌となりました。

このように多くの貸出しがあった「音声版 山と溪谷」は、長年カセットテープで提供していましたが、平成22年4月（2010年5月号）から、音声デージー（注2）へ移行しました。

音声デージーとなった「音声版 山と溪谷」の製作をするにあたって図書館協力者はまず、雑誌の発売日から約2週間で担当箇所を録音します。次に、校正は音訳指導者の監修を受けながら複数人で行います。これにより文字の適切な音声化ができ、より正確で聴きやすい資料の製作につながっています。校正・再録音を経て完成した「音声版 山と溪谷」は、最後にサピエ図書館（注3）にアップロードされ、川越市立図書館の利用者に限らず、全国の視覚障害者等に利用されています。

ここで紹介した「音声版 山と溪谷」の他にも、図書館では様々な録音資料を製作しています。

障害の有無にかかわらず全ての人が読書を楽しむことができるように、障害者サービス担当者や図書館協力者は今後も努力を続けます。



デージー再生機と音声版 CD



「音声版 山と溪谷」校正の様子

注1：現在の川越市立図書館音訳者。

注2：デジタル録音図書。利用するにはデージー再生機が必要です。

注3：録音資料などのダウンロードや相互貸借ができるインターネット上のサービス。